

# 自閉症スペクトラム指数(AQ)日本語版の検討(1)

—— 中学生・高校生・大学生におけるAQの妥当性および  
AQ得点と自己像、内的作業モデルとの関連 ——

**On the Autism-Spectrum Quotient (AQ) Japanese Version (1) :  
Validity for Junior-high-school Students, High-school Students and Undergraduates  
and the Relation of AQ Score to Self-image and Internal Working Models**

林 素賀子  
HAYASHI Sugako

(エール学園日本語教育学科非常勤講師)

竹田 真理子  
TAKEDA Mariko

(元和歌山大学教育学部心理学教室)

2021年9月30日受理

## Abstract

The Japanese version of the Autism-Spectrum Quotient (AQ) (Baron-Cohen et al., 2001) was developed first. The purpose of the present study was to examine its validity for adolescence with normal intelligence and to show whether AQ score is related to the self-image or the internal working models. The developed AQ Japanese version, Image Question (IMQ; Umemoto et al., 1974) and Internal Working Model Scale (IWMS; Takuma & Toda, 1988), were administered to 250 junior-high-school students, 361 high-school students and 603 undergraduates. In results, the AQ scores of the participants were distributed as the spectrum hypothesis suggested. Participants with cut-off scores for AQ were occupied one per cent as same as the occurrence ratio for the autism. Compared to the middle AQ score group, the high score group showed higher ambivalent score and higher avoidant score for IWMS. It was suggested that the students with high AQ score have the negative self-images.

近年の「自閉症スペクトラム(連続体)」仮説によると、自閉症とアスペルガー症候群は独立したカテゴリー概念ではなく、社会的・コミュニケーション障害の連続体上に位置づけられ、知的障害と正常の境目が不明瞭な「境界域」として扱われているのと同じように、自閉症という社会性・関係性の発達障害にも、何が正常で、どこからが異常かという明瞭な境目は存在しないということになる。Baron-Cohen, Wheelwright, Skinner, Martin, & Clubley(2001)は自閉症スペクトラム仮説に基づき、健常な知能を持つ成人の自閉症傾向の程度を測定する目的で「自閉症スペクトラム指数(The Autism-Spectrum Quotient (AQ))」を開発した。

本研究においては「自閉症スペクトラム指数(AQ)」の日本語版を作成し、健常な知能を持つ青少年に対して実施、自閉症傾向の個人差としての連続体仮説が、AQにおいても妥当であるかどうかを調査した上で、AQ高得点者の特徴を自己像と対人態度の側面から分析することとした。それによって、AQがどのような似通った特徴を持つ人たちをスクリーニングするのかを明らかにし、AQの妥当性を検討することを目的とし

た。また、中学生、高校生、大学生に実施することにより、AQで測定される特徴が、発達段階の違いによる影響を受けるか否かについても検討した。

自己像の測定には、投影法の1つであるイメージクエストション(IMQ)を用いて、各人に固有の自己イメージの特質を詳しく分析し、それとAQの合計得点および下位尺度との関連を調査することとした。本来人間のイメージというものは、それ自体が明確なものでなく、質問紙では測定し尽くされないような、微妙な闕下的な襞(ひだ)を含んでいる。そこで、IMQを用いて自己のイメージを比喩的に述べてもらうことにより、被験者自身が必ずしも明確に把握していないような漠然とした自己像や、情緒的な側面を含む質問紙では測定できない部分を浮かび上がらせることができると考えられる。さらに、自閉症者が苦手であるとされている比喩表現の理解も、AQ高得点群では可能かどうかの検討も試みた。

また、自閉症児はその発達の初期に、養育者との間に安定した愛着を形成することが困難であり、また遅れて形成されたとしても健常児の愛着とは質の違うものであることが多い(伊藤, 2002)とされている。この

愛着パターンの個人差を通して対人態度の特徴を調査し、それとAQ得点との関連を調べた。対人態度の測定には内的作業モデル尺度(IWMS)を用いた。安全感を得ることは人間の最も基本的な動機の一つであり、安全感が保証されて初めて、未知の対象との間で相互作用を行うことができる。しかし、この安全感には個人差があり、他者と自己の関係について個人が持つ認知的枠組み、すなわち内的作業モデル(Internal Working Models)によって決まる(Kobak & Sceery, 1988)。また、詫摩・戸田(1988)によると、個人の愛着パターンを特徴づける要因として、安定(secure)型では「対人スキルのうまさと関係性に対する信頼感」が、回避(avoidant)型では「人ざらいと自尊心の強さ」が、さらに相反(ambivalent)型では「過度の親和性と関係性への不安感」が示唆されている。本研究では、これら各人に固有の愛着パターンがAQの下位尺度のどの領域と関連があるのかも調査した。

## 方 法

### 調査対象者

中学生群、高校生群、大学生群の3つのグループの被験者に対し、質問紙への回答を求めた。中学生群は、和歌山県内の公立中学校に在籍する中学1・2年生250名(男性130名、女性120名)で年齢は12~14歳、高校生群は和歌山県内の公立高校に在籍する高校1・2年生361名(男性133名、女性228名)で年齢15~17歳、大学生群は和歌山大学の学生603名(男性402名、女性201名)で年齢18歳~64歳(平均19.3歳)、総計1,214名(男性665名、女性549名)であった。

### 実施検査

自閉症スペクトラム指数(AQ)、愛着パターンの個人差を測定するための内的作業モデル尺度(IWMS; 詫摩・戸田, 1988)、自己像を測定するためのImage Question (IMQ; 梅本・河合・斉藤・出井・岡田, 1974)が実施された。質問紙への記入は教室で一斉に行なわれた。IMQについては、記入に要する時間にかなりの個人差が出ることが予想されたため、1つの質問項目について考える時間は、最長3分をめやすにするよう指示した。なお、性別・年齢のみの記入とし、匿名で回答させた。

AQは、自閉症の症状を特徴とする5つの下位尺度(ソーシャルスキル、注意の切り替え、細部への注意、コミュニケーションスキル、想像力)ごとに各10項目、計50項目から成る。本研究の調査実施当時、若林・東條・Baron-Cohen・Wheelwright (2004)が未公開で邦訳が手に入らなかったため、日本語版の作成にあたっては、Baron-Cohen et al., (2001)がAQとして標準化に使用したものを第一著者が日本語に翻訳し、英語堪能者や在邦米国人にその検討を依頼した。また、自閉症児を養育する母親に、自閉症の特徴という点から、

表現の妥当性について検討を依頼した。さらに、中学生に調査を実施するにあたり、小中学生4名(小学校5年生~中学校3年生、いずれも健常知能)に対して実施し、各質問項目の意味が理解できるかどうかを質問した。そのうえで、中学生段階の子どもに対して適切な表現になるよう改訂を加えた。それぞれの項目について、「そうだ」「どちらかというとそうだ」「どちらかというところが」「ちがう」の4件法で回答が求められた。付録に全項目を示す。

IWMSは、安定(secure)、相反(ambivalent)、回避(avoidant)の3つの下位尺度、各6項目の計18項目から成り、本研究ではそれらをランダムに並べ替えて使用した。各質問に対して、「そうだ」「どちらかというとそうだ」「どちらかというところが」「まったくちがう」の4件法で回答を求められた。

IMQは12項目の中から、父親像と母親像を省き、4項目を選んで実施した。質問は、「私は動物にたとえると、( )に似ていると思います。それは、私が( )からです。」「私は植物にたとえると、(以下同じ)」「私は動物や植物以外のものにたとえると、(以下同じ)」「私は( )に似たいと思う。それは、私が( )からです。」の4項目で、( )の中に自由記述させることで、比喩的に投影された自己のイメージを調査した。

## 結果と考察

### 1. 得点化处理

i) AQの得点化は、Baron-Cohen, et al. (2001)に基づいて次のように得点化し、合計50点満点とした。項目1、2、4、5、6、7、9、12、13、16、18、19、20、21、22、23、26、33、35、39、41、42、43、45、46は「そうだ」「どちらかというとそうだ」という回答に1点を与えた。それ以外は逆転項目で、「どちらかというところが」「まったくちがう」という回答に1点を与えた。下位尺度については、ソーシャルスキル、注意の切り替え、コミュニケーションスキル、細部への注意、想像力の5つの下位尺度ごとに各10項目への回答値を合計して得点化、それぞれ、自閉症傾向が強い、ソーシャルスキルが乏しい、注意の切り替えが苦手、コミュニケーションスキルが乏しい、細部に強い注意を向ける、想像力に欠けるほど、高得点(10点満点)となる。

ii) IWMSの得点化は、詫摩・戸田(1988)に基づき、安定尺度(1、4、7、10、13、16)、相反尺度(2、5、8、11、14、17)、回避尺度(3、6、9、12、15、18)の3つの下位尺度ごとに各6項目の回答値を合計し、得点化した。「そうだ」に4点、「どちらかというとそうだ」に3点、「どちらかというところが」に2点、「まったくちがう」に1点を配した。いずれの下位尺度も、4点~24点の間の値をとる。

iii) IMQの査定と得点化は、梅本ら(1974)に提示さ

Table 1 男女別AQ合計得点(中学生・高校生・大学生・全発達段階)

	中学生			高校生			大学生			全発達段階		
	男女	男性	女性	男女	男性	女性	男女	男性	女性	男女	男性	女性
人数	250	130	120	361	133	228	603	402	201	1214	665	549
平均	19.0	19.2	18.8	19.6	20.2	19.2	20.1	20.3	19.8	19.7	20.1	19.3
中央値	18	18	18	19	20	19	20	20	20	19	20	19
最頻値	17	17	17	18	18	17	20	21	19	17	17	18
標準偏差	4.7	4.8	4.8	4.6	5.0	4.3	5.3	5.4	5.2	5.0	5.2	4.7
最小値	8	8	9	7	8	7	7	7	7	7	7	7
最大値	33	32	33	35	31	35	35	35	35	35	35	35
25パーセンタイル	16	16	15	17	18	16	16	17	16	16	16	16
75パーセンタイル	22	22	22	22	24	22	24	24	23	23	24	22

Table 2 AQ合計得点と下位尺度得点の平均と標準偏差

		AQ合計得点	ソーシャルスキル	注意の切り替え	細部への注意	コミュニケーションスキル	想像力
中学生	全体 (n=250)	19.0 (4.74)	3.28 (1.71)	4.86 (1.63)	5.18 (2.02)	2.90 (1.78)	2.76 (1.75)
	男性 (n=130)	19.2 (4.75)	3.49 (1.69)	4.86 (1.63)	4.82 (2.09)	3.01 (1.83)	2.98 (1.82)
	女性 (n=120)	18.8 (4.75)	3.04 (1.70)	4.87 (1.63)	5.57 (1.89)	2.79 (1.72)	2.52 (1.64)
高校生	全体 (n=361)	19.6 (4.6)	3.55 (1.84)	5.26 (1.58)	4.76 (1.92)	3.12 (1.88)	2.87 (1.57)
	男性 (n=133)	20.2 (5.0)	3.66 (2.03)	5.08 (1.50)	4.83 (1.86)	3.53 (2.08)	3.13 (1.64)
	女性 (n=228)	19.2 (4.3)	3.48 (1.72)	5.36 (1.62)	4.72 (1.97)	2.89 (1.71)	2.72 (1.52)
大学生	全体 (n=603)	20.1 (5.3)	3.63 (1.96)	5.65 (1.85)	4.74 (1.89)	3.08 (1.88)	3.04 (1.73)
	男性 (n=402)	20.3 (5.4)	3.71 (2.02)	5.63 (1.86)	4.66 (1.90)	3.08 (1.93)	3.20 (1.73)
	女性 (n=201)	19.8 (5.2)	3.48 (1.82)	5.67 (1.85)	4.90 (1.87)	3.07 (1.76)	2.70 (1.69)

( )内 標準偏差

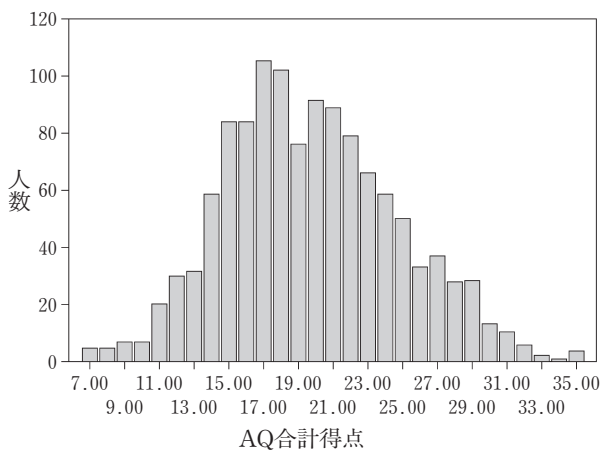


Figure 1 AQ合計得点の分布(全発達段階・男女)

れている基準を参考に、比喩されたものと理由を、それぞれ次の8つのカテゴリと、4つの自己に対する基調感情に分類し、記述回数を得点とした。記述カテゴリは、1： 外貌によるもの(容姿・体型・服装など)、2： 身体的活動、機能的、行動習性、生活習慣、3： 雰囲気、4： 能力(知的能力・運動能力・成就性)、5： 人格、性格(自己の内面に言及しているもの)、6： 対人関係・社会的相互作用、7： その他(分類不能・比喩になっていない)、8： 無回答の8種類、また、自己に対する基調感情は、P：自己肯定的、N：自己否定的、E：中性的・両面的、I：分類不能の4種類である。

## 2. AQの記述統計量および分布

AQ合計得点の記述統計量をTable 1およびFigure 1に示す。この結果から、健常な中学生、高校生、大学生も、その自閉症傾向の程度に従って、AQ尺度上に連続した一定の分布を示した。また、Baron-Cohen et al. (2001)のカットオフ・ポイントである32点をこえる人は、全体で13名(男性7名、女性6名)であり、全調査対象者の約1%にあたる。

## 3. AQの内的一貫性

AQの50項目の信頼性を1,214名のデータで算出した結果、尺度全体で $\alpha=0.98$ を得た。下位尺度別 $\alpha$ 係数は、ソーシャルスキル0.93、注意の切り替え0.91、細部への注意0.91、コミュニケーションスキル0.96、想像力0.94で、いずれも高い信頼性係数を得た。

## 4. AQ合計得点と下位尺度得点における発達段階の差および性差

中学生、高校生、大学生のAQ合計得点と各下位尺度得点の平均と標準偏差をTable 2に示す。合計得点について発達段階と性を要因として、分散分析を行った結果、性の主効果があり、男性が女性よりも有意に高かった( $F(1,1208)=4.12, p<.05$ )。また、発達段階の主効果( $F(1,1208)=4.10, p<.05$ )もあり、Tukey法による多重比較を行ったところ、大学生は中学生よりも得点が高かった( $p<.01$ )。それぞれの発達段階ごとに合計得点の性差についてt検定を行ったところ、中学



生と大学生では有意な差がなく、高校生において男性は女性よりも有意に高い得点をとっていた( $t=2.10$ ,  $df=359$ ,  $p<.05$ )。

各下位尺度得点について、発達段階と性を要因として分散分析を行ったところ、ソーシャルスキル( $F(1,1208)=6.01$ ,  $p<.05$ )、コミュニケーションスキル( $F(1,1208)=6.01$ ,  $p<.05$ )、細部への注意( $F(1,1208)=5.87$ ,  $p<.05$ )、想像力( $F(1,1208)=19.07$ ,  $p<.001$ )で性の主効果がみられ、このうち細部への注意においてのみ、女性が男性よりも有意に高かった。また、注意の切り替え( $F(2,1208)=19.07$ ,  $p<.001$ )と、細部への注意( $F(2,1208)=4.40$ ,  $p<.05$ )において発達段階の主効果がみられた。Tukey法による多重比較を行ったところ、ソーシャルスキルについて大学生は中学生よりも有意に高く( $p<.05$ )、注意の切り替えでは大学生は高校生よりも( $p<.05$ )、また中学生よりも有意に高く( $p<.001$ )、高校生は中学生よりも有意に高かった( $p<.01$ )。また細部への注意においては、中学生は高校生、大学生よりも有意に高かった(それぞれ $p<.05$ ,  $p<.01$ )。細部への注意においては、発達段階と性による交互作用もみられた( $F(2,1208)=3.60$ ,  $p<.05$ )。

AQ合計得点の発達段階による差違については、大学生、高校生、中学生の順に高く、下位尺度得点については、細部への注意以外は男性の方が女性よりも有意に高かった。また、ソーシャルスキル、注意の切り替えの2つの下位尺度において、大学生が最も得点が高く、反対に細部へのこだわりは、中学生、高校生、大学生の順で高かった。

### 5. AQと愛着タイプとの関連

IWMSの3つの下位尺度得点のそれぞれについて、発達段階と性を要因として分散分析を行ったところ、安定得点において、発達段階の主効果が有意であった( $F(1,1205)=8.22$ ,  $p<.001$ )。Tukey法による多重比較を行ったところ、中学生は大学生よりも有意に高く( $p<.001$ )、また高校生は大学生よりも有意に高かった( $p<.05$ )。中学生と高校生との間に有意な差はなかった。相反得点については、発達段階の主効果と性の主効果が有意で(それぞれ $F(2,1205)=4.43$ ,  $p<.05$ ,  $F(1,1205)=11.35$ ,  $p<.01$ )、男性は女性よりも有意に高かった。発達段階についてTukey法による多重比較を行ったところ、高校生は大学生よりも有意に高く( $p<.05$ )、中学生と高校生、中学生と大学生との間に有意差はなかった。また、回避得点については、発達段階・性の主効果、発達段階と性の交互作用ともに有意ではなかった。この結果、中学生、高校生、大学生の順に対人態度が安定しており、高校生が最も対人態度が回避的であること、また男性の方が女性よりも対人態度が回避的であることが明らかとなった。

次に、3つの下位尺度得点についてAQ合計得点お

よび下位尺度得点との間のピアソンの積率相関係数を調べた。その結果、安定得点は、AQ合計得点との間にやや強い負の相関( $r=-.50$ ,  $p<.001$ )、ソーシャルスキルとの間にやや強い負の相関( $r=-.61$ ,  $p<.001$ )、注意の切り替えとの間に弱い負の相関( $r=-.27$ ,  $p<.001$ )、コミュニケーションスキルとの間に弱い負の相関( $r=-.38$ ,  $p<.001$ )、想像力との間にも弱い負の相関( $r=-.23$ ,  $p<.001$ )がみられた。また、相反得点は、AQ合計得点との間にやや強い正の相関( $r=.53$ ,  $p<.001$ )と、ソーシャルスキルとの間に弱い正の相関( $r=.38$ ,  $p<.001$ )、注意の切り替えとの間にも弱い正の相関( $r=.34$ ,  $p<.001$ )を示し、想像力との間には、やや強い正の相関( $r=.52$ ,  $p<.001$ )を示した。回避得点はAQ合計得点および下位尺度得点のいずれとも相関が見られず、また細部への注意は愛着のどのタイプとも相関が見られなかった。

このことから、AQ合計得点の高い人、またソーシャルスキルに欠ける人、注意の切り替えが苦手な人、コミュニケーションスキルに欠ける人、想像力に欠ける人の対人態度は安定しておらず、アンビバレントであることがわかった。

### 6. AQ高得点群の特徴

今後発表予定の研究(2)において、診断された6名の自閉症の人たちのいずれもが30点を下回って得点していたことから、本研究では28点を高得点群とした。28点以上得点していたのは、全体の7.8パーセント(1,214名中94名)であった。また、18~20点の者を平均周辺群とした(22.2パーセント/1,214名中269名)。

#### 6-i. 愛着タイプからみた対人態度の特徴

発達段階と群(高得点群・平均周辺群)別にみたIWMS下位尺度得点の平均と標準偏差をTable 3に示す。

まず、愛着タイプの特徴をみるために、3つの下位尺度得点のそれぞれについて、発達段階と群を要因とする分散分析を行った。その結果、安定得点については群の主効果が有意( $F(1,356)=93.76$ ,  $p<.001$ )で、平均周辺群の方が高得点群よりも高かった。また、相反得点については、群の主効果( $F(2,356)=50.93$ ,  $p<.001$ )と、発達段階の主効果が有意( $F(1,356)=3.86$ ,  $p<.05$ )で、高得点群は平均周辺群よりも有意に高く、また大学生、高校生、中学生の順で高得点であった。さらに、群と発達段階の交互作用( $F(2,356)=4.18$ ,  $p<.05$ )も有意であった。回避得点については、群の主効果のみ有意であり( $F(1,356)=5.37$ ,  $p<.05$ )、高得点群は平均周辺群よりも高得点であった。

この結果から、AQ高得点群は平均周辺群に比べて対人態度が安定しておらず、アンビバレントな対人態度や回避的な対人態度をとることがわかった。このことから、自閉症者は養育者との間に安定した愛着を形

Table 3 健常者AQ高得点群と平均周辺群の発達段階別IWMS下位尺度得点の平均と標準偏差

		安定得点	相反得点	回避得点
AQ高得点群	中学生 (n=14)	13.63 (2.00)	18.63 (1.92)	14.88 (3.44)
	高校生 (n=22)	11.36 (3.25)	19.00 (3.16)	14.64 (3.23)
	大学生 (n=58)	11.43 (3.85)	20.91 (2.73)	14.22 (3.46)
	合計 (n=94)	11.60 (3.58)	20.15 (2.95)	14.40 (3.36)
AQ平均周辺群	中学生 (n=46)	16.30 (3.44)	16.46 (2.96)	12.93 (3.35)
	高校生 (n=98)	16.50 (3.32)	16.74 (3.11)	13.76 (3.82)
	大学生 (n=125)	16.27 (3.22)	16.55 (2.95)	13.38 (3.32)
	合計 (n=269)	16.36 (3.29)	16.60 (3.00)	13.44 (3.52)

( )内 標準偏差

成することが難しいという、これまでの研究結果と類似する特徴がAQ高得点群についても確認された。

### 6-ii. IMQによる自己像の特徴

健常者高得点群と平均周辺群別にIMQの各カテゴリー記述人数とその割合をTable 4に示す。自閉症者が自己を概念化する際に多く用いるとされている物理的陳述(Lee & Hobson,1998)、すなわち外貌について記述のあった人数の割合は、高得点群35.1%、平均周辺群32.3%で、高得点群の方がやや多いものの、よく似た数値であった。また、自閉症者が自己を概念化する際に用いることが少ないとされる精神的レベルでの陳述(Lee & Hobson,1998)、すなわち性格・人格についての記述人数の割合は、平均周辺群70.6%に対して高得点群68.1%とやや少ないものの、半数以上の高得点者がこのカテゴリーでの記述を行っていた。そして、同じく自閉症者が自己を概念化する際に用いることが少ないとされる、社会的レベルでの陳述(Lee & Hobson, 1998)、すなわち対人関係や社会的相互作用について記述のあった人数の割合は、高得点群24.5%、平均周辺群18.6%で、高得点群の方が多かった。

さらに、各得点(記述回数)について中央値より多者と中央値以下の者の人数を算出し、AQ高得点群と平均周辺群を比較した。その結果、自己肯定的な記述を中央値より多く行った人数は、平均周辺群の方が高得点群に比べ有意に多く( $\chi^2=7.98$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )、反対に自己否定的な内容の記述を中央値より多く行った人数は、高得点群の方が平均周辺群に比べて有意に多かった( $\chi^2=17.93$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ )。また自己に対する基調感情が分類不能であった回数が中央値より多かった人数は、平均周辺群の方が有意に多かった( $\chi^2=11.48$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。その他のカテゴリーについては有意な差はみられなかった。しかし、「いつもひとりぼっちだ」「周りに流されやすい」など、対人関係や社会的相互作用について中央値より多く記述した人数の両群の差は有意ではなかった( $\chi^2=1.69$ ,  $df=1$ )ものの、高得点群24.5%、平均周辺群18.6%と、高得点群の方が平均周辺群に比べて多く記述していた。人格・性格について中央値より多く記述した人数に有

意差はなく( $\chi^2=.16$ ,  $df=1$ )、高得点群37名(39.4%)、平均周辺群103名(38.3%)と、ほぼ同じ割合であった。

これらのことから、AQ高得点群は平均周辺群に比べ、否定的な自己像をもっていることがうかがえる。また、人格や性格についての記述を、平均周辺群とほぼ同じくらい行っており、対人的・社会的相互作用についての言及は、有意ではなかったものの、平均周辺群よりもむしろ多かった。このことから、自閉症者が自己を概念化する際に、外貌や身体活動など物理的レベルでの言及は多いが、自分の性格や対人的・社会的相互作用などの精神的・社会的レベルについての言及が極めて少ないとするLee & Hobson(1998)の結果とは一致しないことも示唆された。さらに、AQ高得点群の分類不能への回答数も、平均周辺群に比べて有意に少なく、自閉症者は比喩の理解や行使が困難であるという、これまでの定説とも相容れない結果となった。

### 7. AQの項目反応率

各被験者の項目反応率(得点とされる側への反応率)を、平均周辺群と高得点群とで比較した結果、50項目

Table 4 健常者AQ高得点群と平均周辺群のIMQにおけるカテゴリー別記述人数と割合

記述 カテゴリー	高得点群 (n=94)	平均周辺群 (n=269)
	記述人数 (%)	記述人数 (%)
外貌	33 (35.1)	87 (32.3)
身体活動	42 (44.7)	96 (35.7)
雰囲気	15 (16.0)	29 (10.8)
能力	13 (13.8)	28 (10.4)
性格・人格	64 (68.1)	190 (70.6)
対人関係	23 (24.5)	50 (18.6)
その他	30 (31.9)	110 (40.9)
無回答	24 (25.5)	93 (34.6)
自己肯定的	36 (38.3)	146 (54.3)
自己否定的	79 (84.0)	189 (70.3)
両価的	41 (43.6)	104 (38.7)
分類不能	53 (56.4)	203 (75.5)

( )内は群全体の人数に対する割合

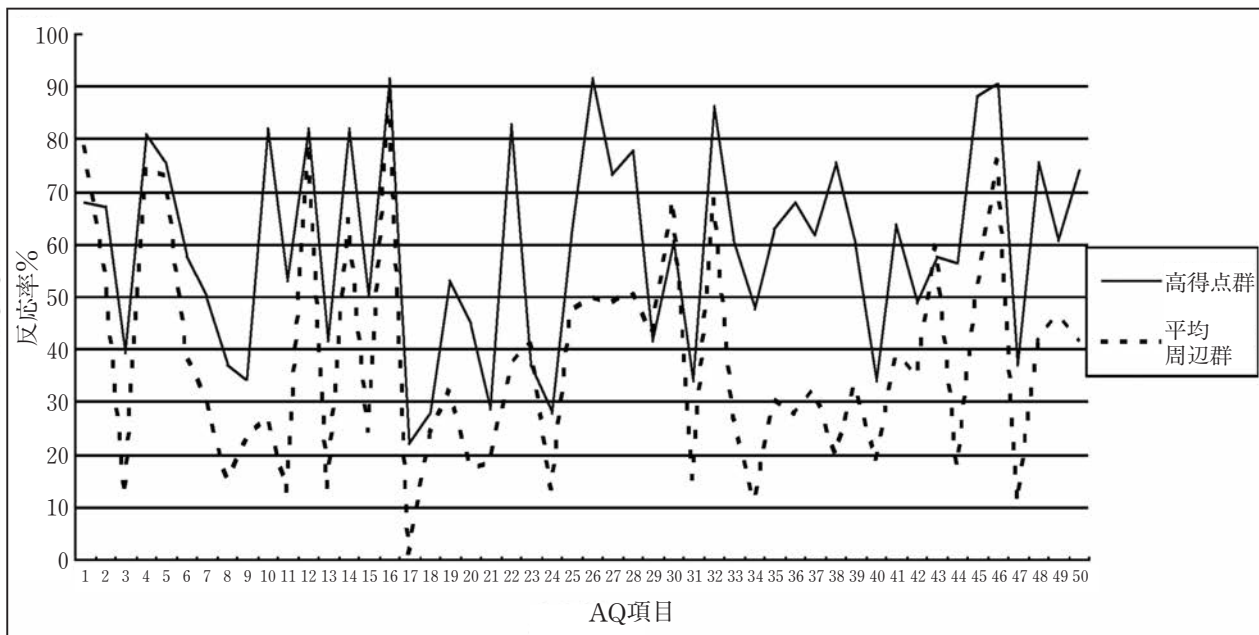


Figure 2 AQ項目反応率(高得点群と平均周辺群)

中5項目(1、23、29、30、43)で平均周辺群が高得点群を上回っており、Baron-Cohenの原著や若林ら(2004)において、50項目中2項目(23、29)のみ、統制群がアスペルガー症候群/高機能自閉症群の反応率を上回っていた、と述べているのとは異なる結果を示した。両群の項目反応率を Figure 2 に示す。また、発達段階別に調べたところ、中学生では50項目中7項目(1、4、12、16、23、43、49)で平均周辺群が高得点群より高い反応を示しており、高校生で3項目(29、30、43)、大学生では4項目(1、23、30、43)で、同様の結果が得られた。このことから、項目1は若林ら(2004)にあるように、逆転項目として処理することが妥当であると考えられるほか、健常者と自閉症者の弁別能力に疑いのある項目が、原著や若林ら(2004)に示されている以外にも含まれていることが示唆された。今後は、回答率に逆転のみられた項目について、さらに慎重な検討を重ねる必要があるだろう。

これまでの調査により、健常な知能を持つ青少年も、その自閉症傾向の程度に従って、AQ尺度上に一定の分布を示すことがわかった。また、Baron-Cohen et al. (2001)のカットオフ・ポイントである32点をこえる者は、中学生・高校生・大学生全体で13名(男性7名、女性6名)であった。これは全被験者の約1%にあたり、自閉症の発症率と同じ数値となった。このことは、健常な知能を持つ中・高・大学生の中に存在する false negativeの可能性を示唆するものと考えられる。そして、男性が女性よりも得点が高いことが認められ、自閉症における発生頻度の性差とも対応する結果となった。これらの点から、自閉症スペクトラム仮説が健常者においても妥当性を持ちうると考えられる。

しかし、若林ら(2004)において、大学生群の方が社

会人群よりも得点が高い傾向が見られ、青年期特有の内閉的傾向が反映されている可能性が示唆されているように、本研究でも、中学生、高校生、大学生のうちで、大学生の得点が高く、大学生と中学生の間の合計得点の差は1%水準で有意であった。このことは、AQによって測定される自閉傾向が、発達段階の違いによる何らかの影響を受ける可能性を示唆している。

さらに、カットオフポイントを越えて得点する人たちの性比を見てみると、男性対女性がほぼ1対1で、自閉症あるいはアスペルガー症候群の発症率の性比(男性対女性10対1)とは異なる結果となった。

また、AQ28点以上の被験者を高得点群として、彼らの特徴を自己イメージと対人態度の側面から調査した結果、高得点群は平均周辺群よりも対人態度が安定しておらず、アンビバレントな、または回避的な対人態度であった。そして、彼らの自己イメージはネガティブであるが、性格や人格の側面から自己を概念化している人や、対人関係や相互作用の面から自己を概念化することが可能な人も存在し、比喩表現の理解や行使も、平均周辺群と同等かそれ以上に可能であった。特に、高得点群の自己イメージの特徴や比喩表現を理解する能力に注目するかぎりにおいては、これまで行われてきた自閉症者の自己概念や比喩理解に関する研究結果とは矛盾する結果であった。

AQ高得点者とはどのような人たちなのかという点について、診断された高機能自閉症およびアスペルガー症候群者との異同をさらに検討することとしたい。

なお、本調査結果において、AQの項目そのものについても、自閉症者と健常者との弁別能力に疑問のある項目もいくつかあり、今後さらにその点についても、調査、検討を重ねていく必要があるだろう。

#### 引用文献

Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., Skinner, R., Martin, J., & Clubley, E. 2001 “The Autism-Spectrum Quotient (AQ) : Evidence from Asperger Syndrome / High-Functioning Autism, Males and Females, Scientists and Mathematicians” *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 31, 1, 5-17.

伊藤英夫 2002 「自閉症児のアタッチメントの発達過程」『児童青年精神医学とその近接領域』43(1),1-18.

Kobak, R. R. & Sceery, A., 1988 “Attachment in Late Adolescence : Working Models, Affect Regulation, and Representations of Self and Others” *Child Development*, 59, 135-146.

Lee, A. & Hobson, R. P. 1998 “On developing self-concepts : A controlled study of children and adolescents with autism” *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 39, 1131-1144.

詫摩武俊・戸田弘二 1988 「愛着理論からみた青年の対人態度：成人版愛着スタイル尺度作成の試み」『東京都立大学人文学報』196, 1-16.

梅本堯夫・河合隼雄・斉藤久美子・出井淑子・岡田康伸 1974 「IMQ作成の試み」『京都大学教育学部紀要』XVIII, 154-170.

若林明雄・東條吉邦・Baron-Cohen, S.・Wheelwright,S. 2004 「自閉症スペクトラム指数(AQ)日本語版の標準化－高機能臨床群と健常成人による検討－」『心理学研究』75(1), 78-84.

#### 付記

本研究は、第一著者が和歌山大学大学院教育学研究科に提出した修士論文(指導教員：第二著者)の一部を加筆修正したものである。

#### 謝辞

本論文の調査に御協力頂いた中学校・高等学校・大学の先生方と生徒の皆様、また質問紙への回答にご協力頂きました保護者の皆様に、深く感謝の意を表します。また、本論文の英文タイトルとAbstractの英文校閲をして下さった、第二著者の友人 Jenny Walls氏にも感謝の意を表します。



## 【付録】AQ日本語版の項目

- 1 何かをするときは、ひとりでするより他の人といっしょにする方が好きだ。
- 2 同じことを繰り返したり、同じ方法でするのが好きだ。
- 3 何かを想像しようとするとき、簡単にそのイメージを頭に思い浮かべることができる。
- 4 1つのことに夢中になって、他の事に気づかないことがよくある。
- 5 他の人が気づかないような小さな物音に気づくことがよくある。
- 6 車のナンバーなどのような、連続した数字や情報に注意がいくことがよくある。
- 7 失礼なことを言っているつもりはないのに、他の人から「失礼だ」と言われることがよくある。
- 8 物語の登場人物がどんな人か、簡単に想像することができる。
- 9 日付や曜日などについてのこだわりがある。
- 10 知っている人が複数いる場面で、いろいろな人との会話を続けることが簡単にできる。
- 11 自分が置かれている立場や状況が、すぐに理解できる。
- 12 ほかの人が気づかないような細かいことに注目することがよくある。
- 13 パーティーよりも図書館に行く方が好きだ。
- 14 事実でない作り話にはすぐに気がつく。
- 15 物よりも人間に興味がある。
- 16 強い興味や関心を持っていることがあり、それができないと混乱することがある。
- 17 他の人とちょっとしたおしゃべりをするのが楽しい。
- 18 自分が話をしているときは、他の人に口を挟ませない。
- 19 数字に対する興味やこだわりがある。
- 20 物語やドラマの登場人物の考えが、理解できないことがある。
- 21 フィクションを読むのはあまり好きではない。
- 22 新しい友人を作るのは苦手な方だ。
- 23 物事の中に、何かの模様やパターンがあるのに気づくことが多い。
- 24 博物館に行くよりも、映画館に行く方が好きだ。
- 25 自分の習慣や、いつもの行動の順序が妨げられても混乱はしない。
- 26 どうやって会話を続けたらいいのか、わからなくなることがよくある。
- 27 他の人と話をしている時、相手の話の行間を読むことが簡単にできる。
- 28 物事の細部よりも全体に注意がいくことが多い。
- 29 電話番号を覚えるのは苦手である。
- 30 周りの状況や相手の様子がいつもとちょっと違っていても、すぐには気がつかないことが多い。
- 31 自分が話している時、相手が退屈そうにしているかどうか分かる。
- 32 何かをしながら他のことを同時にするのは簡単である。
- 33 電話で話している時、自分の話す順番がきてもわからないことがある。
- 34 自分から進んで何かをするのは楽しい。
- 35 冗談がわからないことがよくある。
- 36 相手の顔を見るだけで、その人が何を考えているかがわかる。
- 37 何かをしているときに中断されても、すぐに元のことに戻ることができる。
- 38 他の人とちょっとしたおしゃべりをするのは得意だ。
- 39 同じことを何度も繰り返していると言われることがよくある。
- 40 小さい頃、友達とごっこ遊びをよくした。
- 41 特定のもの(例えば車、鳥、植物など)の情報を集めるのが好きだ。
- 42 他の人のように何かを想像するのは苦手だ。
- 43 どんなこともじっくり計画を立ててからすることが多い。
- 44 他の人との親しい会話や付き合いを楽しいと思う。
- 45 他の人の考えていることを理解するのは苦手だ。
- 46 初めての場所や新しいことをするときは、不安になることが多い。
- 47 知らない人に初めて会うのは楽しい。
- 48 自分は社交的だと思う。
- 49 家族や友達の誕生日を覚えるのは得意だ。
- 50 子どもと「〇〇ごっこ」をして遊ぶのは得意だ。